



Title	Conceptualization of ‘Happy-like’ Feelings in Japanese: A Natural Semantic Metalanguage Approach
Author(s)	坂場, 大道
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92900
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (坂 場 大 道)

論文題名

Conceptualization of ‘Happy-like’ Feelings in Japanese: A Natural Semantic Metalanguage Approach
(日本語における ‘happy-like’ feelings の概念化 : Natural Semantic Metalanguage によるアプローチ)

論文内容の要旨

本研究は、‘happy-like’ feelings の概念化が言語間でどの程度共通しているのか、あるいは異なっているのか（‘happy-like’ feelings の概念化の違いは、語族の異なる言語間でより顕著となるのか、それとも違いにはある程度の限度があるのか）という問いについて考察した。先行研究で扱われている言語とは語族が異なる上、‘happy-like’ concepts を1つに絞るのが困難な日本語を対象とし、英語の happy に相当する日本語の複数の概念の意味分析を通じて、言語によって多様な ‘happy-like’ feelings の概念化に通底する言語横断的な共通性を明らかにした。

第2章では、意味や使用頻度の観点から、5つの概念を日本語の ‘happy-like’ concepts とみなすことができることを論じた。紙幅の都合上、すべての候補を網羅することは不可能であるため、最も有力な候補に焦点を当てた。英語 happy と同じ形容詞に属する「嬉しい」「楽しい」「幸せだ」の3語は、その候補の筆頭と考えられる。しかしながら、これらの語は非1人称主語において、非過去形の言い切りの形で用いられない（*彼は {嬉しい/ 楽しい}）ことから、「喜ぶ」と「楽しむ」という2つの動詞についても考察する必要があることを論じた。このように、一般的に感情形容詞は1人称主語で用いられる傾向があるのに対し、感情動詞は非1人称主語で用いられる傾向がある。こうした現象は、人称制限として知られている。「幸せだ」は感情を表す形容詞であるにも関わらず、非1人称主語でも言い切りの形で用いられる（彼は幸せだ）ものの、非1人称主語の場合は主語の感情ではなく、発話者の主語に対する評価を表す（「彼は幸せだと感じている」）のではなく、「彼は幸せだ」と発話者が「彼」に対する評価を表している）。また、「嬉しい」「楽しい」「幸せだ」「喜ぶ」「楽しむ」の5つ語の文法的振る舞いや意味に関する日本語学の先行研究を概観し、コーパスに基づく包括的なデータを検討する必要性を論じた。特に「嬉しい」と「楽しい」については、「嬉しい」が個人的な感情を表し、「楽しい」が一般的な感情を表すなど、感情の性質や誘因事態の性質の違いから、5つの対立が提唱されているものの、そのうちの3つの対立にはコーパスで反例が観察される。その他の語についても、先行研究は主に統語的な振る舞いに焦点を当てており、各語の意味についての詳細な説明はなされていない。「幸せだ」の意味は、「嬉しい」「楽しい」とは異なることが述べられているのみで、「幸せだ」という語に固有の意味は論じられていない。動詞「喜ぶ」と「楽しむ」は、形容詞「嬉しい」「楽しい」との意味の部分的な類似性が強調されている一方、その違いについては考察されていない。しかしながら、他の言語の同等な概念との比較を通じて、‘happy-like’ concepts に相当する各語の意味の違いを明らかにするためには、より具体的に意味を記述する必要がある。そのためには、抽象的な概念の意味を明確に記述できる適切なメタ言語によって、各語の意味を定義することが重要である。

第3章では、各語の意味を定義する理論的枠組みとして Natural Semantic Metalanguage (NSM) を導入した。NSMにおける意味の定義は、単純で相互に翻訳可能な概念で記述されており、様々な言語の概念の意味を忠実に捉えることができるだけでなく、異なる言語間の意味の類似点と相違点を明らかにすることができる。また、NSMにおいて用いられる概念として、それぞれの文化において好まれる話し方を記す cultural scripts と、意味の類似性を定義に反映させるための雛形である semantic templates についても論じた。本研究は英語の感情形容詞の semantic template を日本語の感情形容詞に応用し、感情動詞については、5章で仮の semantic template を提示した。NSMと認知言語学との比較を通じて、意味を主観的であるとみなす点や、言語の主要な機能を意味とする点において、NSMと認知言語学は共通した意味観を持っていることも示した。他方、意味の表示方法については、認知言語学でしばしば用いられるイメージスキーマの図は言葉による説明なしでは機能しないという考えから、NSMは reductive paraphrase を用いる。最後に、英語と日本語の ‘happy-like’ concepts に関するNSMに基づく研究を概観し、特に日本語の ‘happy-like’ concepts は日本語学の先行研究の知見を踏まえておらず、semantic template にも則っていないことから、日本語学の先行研究から得られる知見を、NSMの枠組みと組み合わせる必要性を論じた。

第4章では、日本語の ‘happy-like’ concepts に相当する3つの感情形容詞である「嬉しい」「楽しい」「幸せだ」の意味を分析した。本研究は感情や誘因事態の性質ではなく、発話者による誘因事態の解釈という観点から各語の意味

を再考することで、先行研究が提示する例やコーパスの反例を含む生起環境の違いも、この解釈の違いの反映として捉え直すことができることを示した。「嬉しい」と「楽しい」には、主に3点の意味の違いがある。誘因事態について、「嬉しい」の感情主体は *something good 'HAPPENED BEFORE'* と考えるのに対し、「楽しい」の感情主体は *something good 'IS HAPPENING NOW'* と考えている。「嬉しい」の感情主体は誘因事態を自分ごと化する (*'something good happened TO ME'*) のに対し、「楽しい」の感情主体は誘因事態に参加していると解釈する必要がある (*'BECAUSE I AM DOING SOMETHING'*)。これらの相違に基づくNSMの定義は、先行研究だけでなくコーパスの例も含む両語のより広い生起環境を説明できる。「嬉しい」と「楽しい」とは異なり、「幸せだ」は、感情主体が複数の誘因事態を評価している (*'many good things are happening now'*)。この意味要素により、「幸せだ」は発話者の感情だけでなく、主語に対する発話者の評価を表すことが可能になると考えられる。その結果として、「嬉しい」や「楽しい」とは異なり、「幸せだ」は非1人称主語でも用いられる(彼は{*嬉しい/*楽しい/ 幸せだ})。また、「幸せだ」の感情主体は誘因事態を自分ごと化しており (*'to me'*)、自分の置かれた状況に満足し、これ以上何も必要ないという満足感を意味する *'I don't want more now'* という意味要素も定義に含まれることを論じた。

第5章では、日本語の *'happy-like' concepts* に相当する2つの感情動詞「喜ぶ」と「楽しむ」の意味を分析した。第一に、英語の *worry about* と *be worried about* という表現の意味の違いに基づき、感情動詞の仮の *semantic template* を提示した。感情動詞の *semantic template* の意味要素は進行相で記され、持続的な時間を表す副詞と組み合わせられている。これは、感情主体が特定の思考について考え続け、それに伴う感情を自分の中で引き起こしていることを示唆する。形容詞の「嬉しい」と「楽しい」が表す感情は、外的な原因によって引き起こされると解釈されるのに対し、動詞の「喜ぶ」と「楽しむ」が表す感情は、感情主体の意識的な思考によって引き起こされると解釈される。従って、感情動詞の *semantic template* は、「喜ぶ」と「楽しむ」にも応用可能であることを論じた。他方、「嬉しい」と「楽しい」の文法的振る舞いの違いが、形容詞の「喜ぶ」と「楽しむ」の間でも観察されるように、「喜ぶ」「楽しむ」の定義は、「嬉しい」「楽しい」の定義と意味要素の多くを共有している。「喜ぶ」の感情主体は *something good 'HAPPENED BEFORE'* と考えるのに対し、「楽しむ」の感情主体は、*something good 'IS HAPPENING NOW'* と考えている。「喜ぶ」の感情主体が誘因事態を自分ごと化する (*'something good happened TO ME'*) のに対し、「楽しむ」の感情主体は誘因事態に参加していると解釈する必要がある (*'BECAUSE I AM DOING SOMETHING'*)。これらの定義の共通性は、動詞「喜ぶ」「楽しむ」が形容詞「嬉しい」「楽しい」と意味が一致するという先行研究の主張と一致する。また、動詞「喜ぶ」は、感情主体が何かを感じていることを周囲の人が察知することを示唆する *'other people in the same place can know this'* という意味要素を持つ。この主張に対して先行研究が提示する反例も、*coercion*の原理を用いることで説明可能となる。加えて、感情が他者から観察可能か否かによって、動詞「喜ぶ」は形容詞「嬉しい」と使い分けられるのに対し、「楽しむ」は、感情主体の周囲の他者から観察されることを示唆しないことを論じた。

第6章では、第4章および第5章で提示した日本語の *'happy-like' concepts* と、3章で概観した英語の *'happy-like' concepts* のNSMに基づく定義の比較から、日本語と英語の *'happy-like' feelings* の概念化の差異を探った。日本語の *'happy-like' feelings* の概念化には (i) 感情形容詞、(ii) 感情動詞、という大きく2つの異なるモードがあり、どちらも一般的に用いられる。一方、英語では、形容詞(擬似形容詞)の使用が主流である。また、各言語における *'happy-like' concepts* の意味要素の特徴も、日英の *cultural scripts* に関連している可能性を指摘した。このように日本語と英語では *'happy-like' feelings* の概念的・語彙的な区別が異なるのに加え、日本語の *'happy-like' concepts* のうち、英語の *happy* と語彙レベルで完全に一致するものはないことを示した。日本語の *'happy-like' concepts* の候補の中で最も英語の *happy* に近い意味を持つ「幸せだ」でさえ、特に物事が感情主体の意図した通りに起こっているかどうかという点で、*happy* とは意味が異なることも論じた。しかしながら、「happy-like' concepts」をより広い視野から改めて考察することで、言語によって異なる *'happy-like' feelings* の概念化に通底する核となる要素が明らかになり、それらの要素を中心とした概念が普遍的な感情の1つを表す可能性が示唆された。これらを踏まえた上で、*'happy-like' feelings* の概念化は言語間でどの程度共通しているのか、あるいは異なっているのか、という冒頭で論じた問いについて再検討した。*'happy-like' feelings* の概念化は言語によって多様であり、それはもっとも基本的と思えるような感情の経験でさえ、言語によって異なることを示唆する。他方、異なる言語における *'happy-like' concepts* に通底する共通の構成要素は、その多様性の根底には共通の基盤がある可能性を示している。

第7章では、本研究の議論をまとめ、課題について言及した。本研究の対象範囲に含まれなかった他の *'happy-like' concepts* や、本研究で提示した核となる要素が他の言語の *'happy-like' concepts* でも観察されるかどうかは、さらなる研究が必要である。本研究が対象とした言語でも、日本語は意味と頻度から最も有力な候補を選択したのに対し、英語は先行研究で *happy* に近い意味を持つとされる語のみを検討した。本研究の対象範囲外であった言語に加え、英語の *'happy-like' concepts* とみなされうる他の概念 (*amused*や*enjoy*など) についても、さらなる検討の余地がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (坂 場 大 道)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授
	副 査	准 教 授
	副 査	教 授
		早 瀬 尚 子
		小 栗 哲 哉
		大 森 文 子

論文審査の結果の要旨

本論文は、＜幸せ＞に関わる感情（‘happy-like’ feelings）が異なる言語間でどのように切り分けられているのか、その共通点と相違点を通言語的に比較対照するという大きな目標の元、主に日本語の「嬉しい」「楽しい」「幸せだ」「喜ぶ」「楽しむ」という5つの表現を考察対象とし、著名な意味論学者であるオーストラリアのWierzbicka氏が提唱するNatural Semantic Metalanguage (NSM) 理論に基づいてその違いを包括的に説明しようとする試みるものである。感情表現に関する語義の差についてはこれまでも統語的な違いに着目した分析がなされているが、本研究はその感情そのものの本質的な規定の違いについて主に踏み込んで明らかにしようとしている。全体で7章からなる論考である。

2章では、5つの日本語表現「嬉しい」「楽しい」「幸せだ」「喜ぶ」「楽しむ」の文法的振る舞いや意味に関する日本語学の先行研究を概観し、コーパスに基づく包括的なデータを検討する必要性を論じた。特に「嬉しい」が個人的な感情を表し、「楽しい」が一般的な感情を表すなど、感情の性質や誘因事態の性質の違いから、5つの対立が提唱されているものの、そのうちの3つの対立にはコーパスで反例が観察されていることが指摘される。また、先行研究は主に統語的な振る舞いに焦点を当てており、各語の意味についての詳細な説明はなされていないか、等閑視されている語彙もあることを確認している。

3章では、本論文の枠組みであるNSM理論について詳細に説明が行われる。この理論は、言語間において類似する同等概念との比較を行うことを目的とするもので、相互に翻訳可能と想定される単純かつ限定された語をメタ言語として採用し、それを用いて意味の定義を行うことによって、意味概念を規定し、また異なる言語間での意味の類似点と相違点を比較対照することができる。NSMでのメタ言語記述は、各々の言語文化で好まれる話し方を記す cultural scripts と、意味定義の雛形としての semantic templates から成り立つ。本論文では主に後者の semantic templateを用いて、日本語の関連表現5つの差異を分析する。また、認知言語学との共通点と相違点についても議論され、事態を発話者が「解釈」したものとして意味概念を考えるというスタンスをとる一方で、reductive paraphraseというsemantic primeと呼ばれる基本語彙を用いたメタ言語による条件の記述の集合として意味を規定していく点が異なることを確認した。さらには、NSM理論での分析事例として英語における‘happy-like’ conceptsの先行研究での分析についても紹介し、6章以降での比較検討への布石をうっている。

4章では、日本語の3つの感情形容詞「嬉しい」「楽しい」「幸せだ」の意味を分析し、その違いをNSM理論に基づいて明示化している。日本語学の先行研究で提案されている条件は感情や誘因事態の性質を明確かつ客観的な形で決定したものだったが、本研究ではそれは発話者による誘因事態の「解釈」という柔軟性を取り込む必要があると主張し、これに基づいて先行研究への反例等も説明できることを示した。具体的には、「嬉しい」の感情主体が誘因事態をsomething good ‘HAPPENED BEFORE’つまり先行するものと解釈するのに対し、「楽しい」の場合はsomething good ‘IS HAPPENING NOW’つまり感情と同時生起と捉えていると分析する。また、「嬉しい」の感情主体は誘因事態を自分ごと化する（‘something good happened TO ME’）のに対し、「楽しい」の感情主体は誘因事態に参加していると解釈する必要がある（‘BECAUSE I AM DOING SOMETHING’）。また、「幸せだ」は、感情主体が複数の誘因事態を総合的に一般化する形で評価している性質が特徴として見られることから、メタ言語として‘many good things are happening now’を含めて規定する必要があると主張する。この意味要素により、「幸せだ」は発話者の感情だけでなく、主語に対する発話者の評価を表すことが可能になるとも説明される。

5章では感情動詞である「喜ぶ」と「楽しむ」の意味を分析している。4章で見た形容詞の「嬉しい」「楽しい」が表す感情は、外的な原因に引き起こされると解釈されるのに対し、本章で見る動詞の「喜ぶ」「楽しむ」は、感情主体の意識的な思考に引き起こされると解釈され、これは一つ大きな違いとなる。一方で、4章で観察した「嬉しい」「楽しい」の対立と類似する対比が動詞の「喜ぶ」と「楽しむ」にも並行して見られることを指摘し、「喜ぶ」は先行する誘因事態により自分事化して解釈するのに対して「楽しむ」は感情と同時に生じている事態に自分自ら参画していると解釈される必要があることを論じている。ここまでで、日本語の5つの語彙の相互の関連性・類似点と相違点が、NSM理論によって示されることとなる。

6章では、4、5章で分析してきた日本語の概念と、3章で提示した先行研究における英語の概念とを比較対照している。日本語には(i)感情形容詞(ii)感情動詞の2つのモードがある一方、英語では(疑似)形容詞が主流であることや、Wierzbicka(1996)が提案する日英の cultural scriptsに沿った形で各言語の‘happy-like’ conceptsの意味要素が固有の形で対応している可能性が指摘されている。また、NSM理論の分析によって、日本語の‘happy-like’ conceptsがいずれも英語のhappyとは感情に対する捉え方が異なること、またそれが具体的にどの点で異なっているのかの差異化が明示された。さらには、NSMにおいて、複数の言語で共通して見られると想定される基本的な感情ごとにcore componentsの束が異なった形で提案されていることを踏まえ、その中に本論文で明らかになった‘happy-like’ feelingsのcore componentsのひな型を新しく提案できる可能性についても述べている。

7章はまとめである。本研究で‘happy-like’ feeling分析で核となる要素として用いた要素がさらに多くの言語で観察できるものなのか、また本論文で扱えていない他の表現もこの要素で差異化を説明できるのかなどの課題について述べている。

本論文の評価できる点として、日本で数少ないNSM理論を用いた独自性色の強い研究であることが挙げられる。また、NSM理論という特定の分野の分析手法だけに埋没するのではなく、日本語学における見解や認知言語学における基本理念や言語観を利用し、かつ横断する形での言語観察・分析を行っている点が評価できる。特に、日本語学の先行研究における分析主張の不足点を丹念に指摘し、地道かつ着実な言語分析を行って、新たな代案を提出している論考である。さらには、人口の少ないNSM理論者のコミュニティの中にあつて、具体的な言語分析を詳細に行うことでNSM理論の可能性とその不備を指摘して理論的發展にも貢献する大きな功績と言える。

公聴会では以下のような点が疑問点として挙げられた。(1) NSMでのsemantic templateの項目として「自分ごと化(personalization)」や「感情表出」の有無の違い、また「感情を引き起こす事態が単数か複数か」によって使い分けを区別しているという議論をしているが、この有無については現実には具体的な表現を検討する際にずれが見られるケースがあり、どの程度の制約力があるのか、修正の余地はないのか、(2) happy vs. happinessなどの品詞の違いや同じ品詞でも叙述用法(「幸せだ」)に対して限定用法(「幸せなN」)の違いなども見られることをNSMではどのように書き分けるのか、(3)感情表現を分解してその固有の要素をCultural scriptとの対応で説明するところでは、認知言語学的なICMやframeといった概念での説明とどのように比較対照し優劣を議論できるのか、(4)共起名詞を解釈する際にもNSMに沿った形で話者の解釈がなされる必要がある、という主観的・認知的側面を考察すべきではないか、などである。また(5)NSM理論の枠内で説明が適切にできない側面については、むしろ日本語の考察から得られた知見をNSM理論に反映させ、また修正を促すという積極的な見解を提示すべきではないかという意見も見られた。

いずれも今後申請者によるさらなる考慮・改良、または理論そのものの有効性の検討や精緻化に関わる再考および改善、また理論間での詳細な比較検討が望まれる論点であったが、本論文そのものは現状において十分なクオリティをもつものとして審査委員一同の意見の一致が得られた。

以上のことから、本論文を博士(言語文化学)の学位論文として価値のあるものと認める。